

若手研究者奨励賞 2025 受賞者と講評

受賞者 1：茂住政一郎(横浜国立大学 国際社会科学研究院 准教授)

<https://researchmap.jp/seiichiromozumi>

茂住政一郎氏は、アメリカ税制を専門とする財政社会学者である。歴史学で高く評価される Social Science History を始めとする有力な英文雑誌に論文を掲載するなど、国の内外で活躍の幅を広げており、特に同誌掲載の“Tax Expenditures and the Tax Reform Act of 1969 in the United States” 対しては第 32 回租税資料館賞が授賞された。2023 年には、昨年本賞を受賞した小西杏奈氏とともに、著名な社会科学者を招聘した国際カンファランス “Reconsidering History, Diversity, and Legitimacy of Public Finances, Fiscal States, and Social Contracts during the 20th and 21st Centuries” を主催し、そこでの成果は、両氏らを編著者とする英文著作としてまとめられ、公刊に向けた査読が進められている。このように、茂住氏の一連の研究は、財政社会学の発展に連なる新たな視座を提供するものであり、茂住政一郎氏は、若手研究者奨励賞を授与されるにふさわしい研究者であると評価される。

受賞者 2：森田裕史氏(東京科学大学 工学院 准教授)

<https://researchmap.jp/70732759>

森田裕史氏は、国の財政活動とマクロ経済の関係を分析し、2014 年に一橋大学で博士（経済学）を取得した。Journal of Macroeconomics、Economic Modelling、Japan and the World Economy 等に掲載された論文群では、日本経済に対する外部ショックや財政ショックがマクロ経済や財政の持続性に与える影響を、Sign Restriction を課した構造 VAR 等の時系列モデルを用いて数量的に解明している。特筆すべきは非線形時系列分析に関する造詣の深さであり、マルコフスイッチングモデルを応用して経済状態別の政策効果の差異を明らかにするなど、その分析手法の精緻さと先進性は目を見張るものがある。また Journal of the Japanese and International Economies に掲載された論文では、日米のマネタリーベース差と為替レートとの長期的関係（いわゆるソロス・チャート）を理論モデルとベイズ推定により検証している。このように、森田氏の一連の研究は、日本財政分析のみならず、日本経済全体の構造や政策効果の理解にも新たな視座を提供しており、森田氏は、若手研究者奨励賞を授与されるにふさわしい研究者であると評価される。